

第7回 ニッケピュアハート エッセー大賞

<中学の部 優秀賞>

「未来へ」

岡崎優理

もし半年前に、あなたの将来の夢はなんですかと聞かれたら、私は間違いなく医者になることだと答えていただろう。大阪教育大学附属池田小学校出身のわたしには小さいころから命の大切さを学ぶ機会がたくさんあった。だから直接的に人の命を救うことが出来る医者にならんと憧れを抱いていたのだと思う。

中学3年生の春、学校の社会参加実習という形で3日間病院で働かせてもらった。救急外来を見学させてもらっていた時患者さんが運ばれてきた。そこで初めて実際に生死をさまよう人の姿を見た。もし自分が患者としてこの場にいたなら、目を開けば見えてくる真っ白な天井に、見たこともない医療機器に、白衣をきた医者や看護師が慌ただしく動き回るこの状況に、たとえようのない不安がつのっていただろう。そう思うとどうしようもなく怖くなってしまった。病院という場所が。医者という仕事が。…そして死という言葉が。テレビでは何度も見て、こういう人を助ける仕事につきたいと思っていたはずなのに。

私はここで初めて、医者は人の死を常に身近に感じて生きなければならない職業だということに気が付いた。あたりまえのことなのに、ここにいる医者たちは何人分の命を背負っているのかと考えるとあまりの責任の重さに私の心まで重くなってしまった。もし医者になったとしても私にはそんなに多くの人を預かることができるのだろうか。毎日毎日死と隣り合わせの生活で、息苦しくはならないだろうか。様々な不安が一気にわたしの胸をしめつけたのだった。

いま、あなたの将来の夢は何ですかと聞かれたら医者になることだと素直に答えることはできない。けれど、ここには半年前よりは確実に大人になったわたしがいる。だからたとえ最終的に違う道を選ぶことになったとしても、その道で精一杯生きていこうと思う。